



ミース・ファン・デル・ローエのモンタージュと空間表現についての研究

岩田, 章吾

(Degree)

博士 (工学)

(Date of Degree)

2006-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3732

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003732>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 3 2 5 】

氏 名・(本 籍)	岩田 章吾	(大阪府)
博士の専攻分野の名称	博士 (工学)	
学 位 記 番 号	博い第416号	
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当	
学位授与の 日 付	平成18年9月25日	

【 学位論文題目 】

ミース・ファン・デル・ローエのモンタージュと空間表現に
ついての研究

審 査 委 員

主 査	教 授	足立	裕司
	教 授	安田	丑作
	教 授	長尾	直治
	助教授	末包	伸吾

Ludwig Mies van der Rohe (以下ミースと記す)はその建築家としての出発点から、晩年にいたるまでモンタージュ手法を用いたドローイング作品(以下モンタージュと記す)を数多く作成し、その多くは実際の建築と同様に、展覧会や書籍などに展示・引用されている。また、ミースの作り出す空間を「モンタージュ的」という表現によって論じる事例もいくつか見受けられる。このように、ミースの建築を語る上で、モンタージュが一つのキーワードとなっているにもかかわらず、実際にミースの作成したモンタージュ自体に焦点を絞った研究が少ないのが現状である。現在のミース研究は、実際の作品分析と、図面の分析が中心となっている。これは、モダニズムの巨匠と呼ばれるほかの建築家たちとは異なり、ミースが自らの建築に関する考えを書籍などで体系的にまとめることのなかった建築家であり、自らの建築についての構想に関する言説は限られたものとなっているためと考えられる。一方、前述のように、ミースのモンタージュは、実際の作品と同様に展覧会や書籍に参照されており、このことから、ミース自身がモンタージュをミースの建築のイメージや理念を伝える手段として重要視していたと考えられる。また、実際の建築に比べて技術的、社会的要求から比較的自由であると考えられるモンタージュは、実際に建設された作品より建築家の意図が直接的に表現されうる媒体であると考えられる。これらのことから、本研究ではミースのモンタージュの分析を通じて、ミースが自らの建築空間をどのようなものとして構想していたかを推察することを目的とする。論文構成は以下のとおりとする。

1章：言説に見るミースの建築概念について

ミースの建築についての言説は、数が少なく、書籍などの形でまとまったものもないため、今までそれほど重要視されてこなかった。しかしその一方で、ミースはその初期のキャリアより、自らを言説とドローイングを自らのアイデアをつたえる手段として注意深くコントロールしていたといわれる。この章では、ミースの言説から彼の建築概念とその時代との関係などを分析する。

2章：ミースによるモンタージュの特質

ミースが作成したモンタージュの大半がダダリストや構成主義者による非透視図的なモンタージュではなく透視図的に描かれたものである。この章ではミースの作成した全てのモンタージュの特質を分析することにより、ミースにとってのモンタージュの役割、表現意図などをハンドドローイングとの比較によって考察する。

3章：モンタージュに見るミースの空間表現の特質

ミースのモンタージュのうち、彼の建築空間の特質をより明確に表現していると考えられる内視透視図のモンタージュの分析を通じて、これらの空間表現におけるミースの意図を考察する。

結章

以上のような全体の論旨から、本論分の結論を以下の4点に示す。

1. 言説に見るミースの建築概念の二重性
2. 建築空間の表現手法としてのミースのモンタージュの役割
3. ミースのモンタージュによって表現された建築空間の特質
4. 今後の課題

1. 言説に見るミースの建築概念の二重性

ミースの言説は1920年代において大きく変転したが、1930年以降は晩年まで大きく変わることはなかった。その言説は観念的であり体系的なものではないが、有用性などの近代の特質を建築の前提として無条件に受け入れたうえで、建築の意義をこれらの前提とは異なる美にみだし、両者を統合することなく並置することで、有用性と美を両立可能とした。この建築概念における二重性にミースの独自性が見出せる。

2. 建築空間の表現手法としてのミースのモンタージュの役割

第2章では、ミースのモンタージュの特質をハンドドローイングの特質との比較において分析した。ミースのモンタージュは、ドイツ期には、都心部の高層建築を外観から描き、新しい建築と旧来の街区の関係を対比的に描いた。アメリカ期にはその大半が、内部空間を描いており、それぞれ特定の表現内容に特化した手法であった。

ミースのモンタージュはそのほとんどが透視図の形式で作成されており、ダダイストや構成主義のモンタージュとは形式が異なり、直接的な影響はみいだせない。しかし、その特質は、①素材の対比的関係による、ひとつの絵画としての統一性の破壊と画面の活性化、②特定の意味を形成する断片の配置による画面への新たな意味の付加、といったダダや構成主義のモンタージュにおける特質と共通する部分が見出せる。そのため、ミースのモンタージュは、単なる、透視図の代替ではなく、建築の概念的な特質を表現するための手法として側面を有していたといえることができる。

とくに、アメリカ期に作成された内視透視図のモンタージュはモンタージュ手法を透視図と重ね合わせることで、計画された空間の絵画的再現としての表現とミースの空間の概念的表現という二重の意味を担うことが可能になっており、ミースの建築空間を理解するうえで手がかりになると考えられる。

3. ミースのモンタージュによって表現された建築空間の特質

ミースの内部空間を描いたモンタージュは建築を単線ドローイングの背景として描いた内視モンタージュ A と建築を模型写真やほかの建築の写真などで表現した内視モンタージュ B が存在する。内視モンタージュ A はドローイングの建築空間の背景に内部空間の要素としてモンタージュ素材を配置することで、空間内部の要素が建築から切り離され、可変的なものであることを、モンタージュ手法を使用することで的確に表現している。一方、内視モンタージュ B は建築をその表現を中心とし、その壮大さや、美を表現している。この二つのモンタージュは、ミースの空間の二つの特質、建築形態とその内部で用途とそれに即した空間構成との明確な分離を表現していると考えられる。1章において、ミースは建築概念の二重性を反映しうる空間形式としてのユニバーサルスペースの可能性を指摘した。ミースのこの二つのモンタージュは、ユニバーサルスペースとその前段階を含めたミースの空間の持つこのような二重性のそれぞれ特質を抽出した表現であると考えられる。

ミースのモンタージュによって表現される外部空間は、内部空間の延長としての外部空間と、建築家のコントロール外の「真の」外部空間とに二分される。前者は内部空間の延長としてその外部としての特質は失われている一方、後者は、人間のための抽象化された内部空間と相容れない空間としてスペクタクル化した大自然などのイメージによって象徴的に表現されている。

4. 今後の課題

以上のような考察から、以下の2点が今後の主な課題となる。

(1) 実施作品における本論文の結論の検証

本論文で見出された空間の特質がミースの実作において、どのように反映されているか、また反映されていないのかの検証を行う。特に、3章において見た、モンタージュ手法によって生み出された対比的関係、つまり、建築形態と利用形態の対比的関係および、内部空間と外部空間の対比的関係が実際の建築空間においてどのように反映されているかを確認していく。

(2) ミースの思想的背景の検証

1章で見たミースの建築概念の二重性がどのような背景からもたらされたかについて、また、3章で見た内部空間と外部空間の対比的な関係などについてミース思想的背景と当時の時代背景の関係性から分析する。このことによって、当時の近代建築が抱えていた問題をより明確に把握できると考える。

氏名	岩田 章吾		
論文 題目	ミース・ファン・デル・ローエのモンタージュと空間表現についての研究		
審査 委員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	足立 裕司
	副 査	教授	安田 丑作
	副 査	教授	長尾 直治
	副 査	助教授	末包 伸吾

要 旨

Ludwig Mies van der Rohe (以下ミースと記す)のモンタージュ作品を主に研究した論文である。ミースは、その建築家としての出発点から晩年にいたるまで、モンタージュ手法を用いたドローイング作品(以下モンタージュと記す)を数多く作成し、その多くは実際の建築と同様に、展覧会や書籍などで展示・引用されている。モンタージュは、ミースの建築を語る上で一つの重要なキーワードとなっているにもかかわらず、ミースの作成したモンタージュに焦点を絞った研究がほとんどなされていないというのが現在の研究状況といえる。ミースはモダニズムの巨匠と呼ばれる他の建築家たちとは異なり、自らの建築に関する考えを書籍などで体系的にまとめることがなかった建築家であった。そのため、自らの建築についての具体的な説明は限られたものとなっており、多くは本人からの聞き取りによる紹介的な内容か技術論に終始する内容であり、彼の作品にとって重要とされている空間についての研究は実際の作品分析、または図面からの形式分析が中心となっている。

本論文は、ミースにとってモンタージュが自らの建築を表現する重要な手段であったことに注目することで、モンタージュの分析によってミースの作品解釈に新たな視点を与えることを目的としている。本研究は、従来、二次的な扱いしかなされてこなかったミースのモンタージュを体系的に整理することから始まり、それらモンタージュの技法や構図、描かれている内容を分析することによって、ミースの建築空間との関連を探っている。また、以上のような分析を行うにあたって、本研究ではミースのモンタージュとの比較を行うために、必要に応じてハンドドローイングとの比較検証を行っている。

本論文は以下のとおり3章からの構成されている。

1章：言説に見るミースの建築概念について

基礎的な作業として、数少ないミースの言説について検討を加え、その内容の分析を行っている。この作業は、観察者によって恣意的になりがちな形式的な分析の予備的な作業であり、本論ではミースの発言が年代において大きく変転していることを指摘している。すなわち1920年代において大きく変転することを指摘し、1930年以降は晩年まで大きく変わることはなかったとしている。1920年以前では、機能性・機械化・標準化といった当時の論点そのまま繰り返されているのにたいして、1930年以降では、それらを統合するより高次の概念として、時代精神や人間性、美といった関心へと移行していることを指摘している。彼の言説は観念的であり、体系的なものではないが、有用性などの近代の特質を建築の前提として無条件に受け入れたうえで、建築の意義をこれらの前提とは異なる美に見出し、両者を統合することなく並置するという二重性にミースの独自性が見出せることを指摘している。

氏名	岩田 章吾
2章ミースによるモンタージュの特質	
ミースが作成したモンタージュの大半はダダイストや構成主義者による非透視図的なモンタージュではなく、透視図的に描かれたものである。本章ではミースのモンタージュの特質を分析することにより、ミースにとってのモンタージュの役割、表現意図などをハンドドローイングとの比較によって考察している。	
まず、ハンドドローイングとの比較から、ミースのモンタージュは、ドイツ期には、都心部の高層建築を外観から描き、新しい建築と旧来の街区の関係を対比的に描いていること、さらにアメリカ期ではその大半がフリースペースの内部空間を描いており、それぞれ特定の表現内容に特化した手法であることを指摘している。	
ミースのモンタージュは、そのほとんどが透視図の形式で作成されていることから、ダダイストや構成主義のモンタージュとは形式が異なり、直接的な影響はみいだせないとしながらも、①素材の対比的関係による、ひとつの絵画としての統一性の破壊と画面の活性化、②特定の意味を形成する断片の配置による画面への新たな意味の付加、といったダダや構成主義のモンタージュにおける特質と共通する部分が見出せることも指摘している。	
以上から、ミースにとってモンタージュは単なる、透視図の代替ではなく、建築の概念的な特質を表現するための手法としての重要な役割を与えられていたと推察している。とくに、アメリカ期に作成された内視透視図のモンタージュはモンタージュ手法を透視図と重ね合わせることで計画された空間の絵画的再現としての表現とフリースペースの持つ空間的特質の概念的表現という二重の意味を担うことが可能になることを示しており、ミースの建築空間を理解するうえで手がかりとなる指摘といえる。	
3章：モンタージュに見るミースの空間表現の特質	
ミースのモンタージュのうち、彼の建築空間の特質をより明確に表現していると考えられる内視透視図のモンタージュの分析を通じて、ミースの建築空間について考察している。	
ミースの内部空間を描いたモンタージュは建築を単線ドローイングの背景として描いたカテゴリー1のモンタージュと建築を模型写真やほかの建築の写真などで表現したカテゴリー2のモンタージュが存在するという分類を行っている。カテゴリー1のモンタージュはドローイングの建築空間の背景に内部空間の要素としてモンタージュ素材を配置することで、フリースペース内部の要素が建築から切り離され、可変的なものであることを、モンタージュ手法を使用することで的確に表現している。一方、カテゴリー2のモンタージュは建築をその表現を中心とし、その壮さや、美を表現している。この二つのモンタージュは、ミースのフリースペースの二つの特質、フリースペースとしての特質とそれを成立させる建築表現の特質を表現していることを指摘している。	
ミースのモンタージュによって表現される外部空間は、内部空間の延長としての外部空間と、建築家のコントロール外の「真の」外部空間とに二分され、前者については内部空間との連続性は強調されるが、後者については内部空間と完全に分離した空間として扱われている。内部空間の延長である外部空間は内部との連続性が強調されるとともに、外部の特性が消去されている。一方、内部と分離した外部は、徹底的に内部空間との連続性や交流の可能性が消去され、単なる視覚的対象、スペクタクルとしての風景へと還元されていると分析している。	
本研究はミースの作品について、彼の作成したモンタージュ作品が建築空間についての意図を表現するものであることを解明した点で重要な知見であり、価値ある集積であると認める。よって、学位申請者の岩田章吾は、博士(工学)の学位を得る資格があると認める。	